

参考資料 サーベイメータの取扱方法

I.GMサーベイメータ

ALOKA TGS-136

ALOKA TGS-146

II.NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータ

ALOKA TCS-161

ALOKA TCS-171

III.個人線量計

ALOKA ADM-112

TECHNOL DOSE³

GMサーベイメータTGS-136の取扱方法

GMサーベイメータ（日立アロカメディカル製TGS-136型）の外観および各部の名前を写真I.1.1に示す。



写真I.1.1 GMサーベイメータ（日立アロカメディカル製TGS-136型）

(1)各部の名称と働き

①GMプローブ

GM計数管が収納されており $\beta(\gamma)$ 線を検出する。

②RESETスイッチ

メータを初期状態にリセットする（指針がゼロに戻る）。

③COUNT RATEスイッチ

メータの最大スケールを [100]、[300]、…、[30k]、[100k] (min^{-1})の7段に切り換える。メータの指示計数率が小さすぎず、かつ振り切れないような適切なスケールを選択する。

④TIME CONST.（時定数）スイッチ

メータの時定数を [3]、[10]、[30] (sec.)のいずれかに切り換える（メータ指示値

の読み取りには時定数の2～3倍の時間が必要である)。

⑤FUNCTIONスイッチ

電池の電圧チェック [BATT.]、高電圧のチェック [HV]、測定 [USE] およびスイッチオフ [OFF] の切り換えをする。スピーカーのスイッチをオンにすると $\beta(\gamma)$ 線を検出するたびにクリック音がスピーカーから出る。

⑥指示計 (メータ)

計数率を示すメータで、下側の目盛りでは0～100の単位で計数率 [min^{-1}] が示され、上側の目盛りでは0～300単位で計数率 [min^{-1}] が示されている。③で選択した最大スケールに対応している。

⑦液晶表示器

メータで示す計数あるいは計数率をデジタル表示にする。

⑧RATE-SCALERスイッチ

RATEにすれば、液晶表示は計数率になる。また、SCALER側に切り換えれば、プリセット(PT)スイッチにより設定した時間当たりの計数値 (例えば、PTスイッチを [0.1] に設定すれば [カウント数/0.1min]) を表示する。

(2)操作方法

1)電源チェック

①FUNCTION切り換えスイッチを [OFF] から [BATT.] の位置にして、電池の電圧をチェックする。メータの指針が右半分の緑帯 (グリーンベルト) の位置にくることを確認する。メータの指針が緑帯まで達しないときは電池を交換する。

②FUNCTIONスイッチを [HV] の位置にして、高電圧をチェックする。メータの指針がHVと書かれた赤帯 (レッドベルト) まで達しないときは、専門家による調整が必要である。

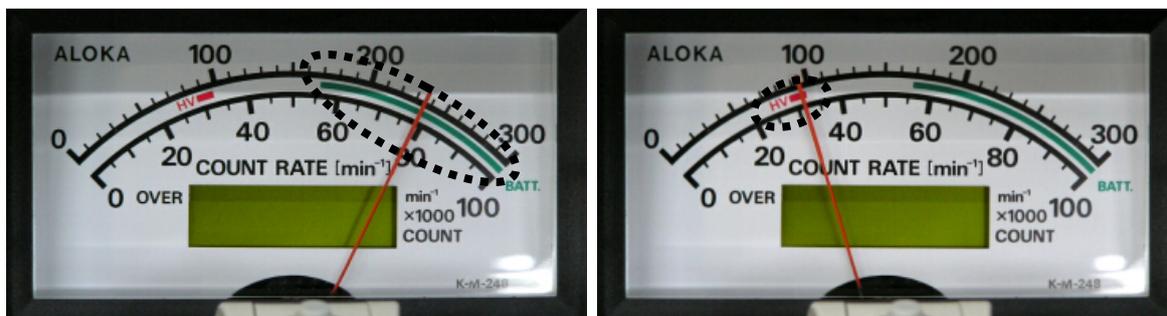


写真 I.1.2 サーベイメータの使用前チェックによる指示例
(左: BATT.チェック、右: HVチェック)

2) 身体表面汚染の測定法

①GMプローブをラップフィルムや薄手のビニール袋等で包む。

(スピーカーのスイッチはOFFの状態を使用する。)

バックグラウンド計数率を測定する。このときの時定数として10秒を選択する。

②GMプローブの窓面を身体表面より約1cm離し、身体表面の各測定部位内をゆっくりとした速さ(3~6cm/s)で移動させて、計数率が最大となる場所を探す。最大値が得られた場合、その場所にGMプローブを約30秒保持してから計数値を読み取る。

③メータの指針が振り切れたり小さすぎないように、COUNT RATEスイッチにより適当なレンジを選択する(COUNT RATEを切り換えたときは、指針の振れが落ち着くまで若干の時間を要する。)

④計数率が低くて指針がふらつく場合は、TIME CONST. (時定数) を10秒または30秒に設定し指針の振れ幅の中央値を読み取る。

⑤指示値の読み方は、COUNT RATEがどの値に設定されているかによって変わるので、必ず確認する。

⑥測定が終了した後は、FUNCTION切り換えスイッチをOFFの位置に戻す。



写真 I .1.3 表面汚染検査用サーベイメータによる測定例

〔この写真の場合、COUNT RATEが [30k] の場合⇒15,000min⁻¹
[1k] の場合⇒ 500min⁻¹〕

3) 注意事項

①GMプローブは破損しやすいため、特に注意して取り扱い、衝撃等は加えないようにする。

②ケーブルには断線の原因となるような力を加えないようにする。

③測定していないときはFUNCTION切り換えスイッチを [OFF] にする。

④サーベイメータは常温、低湿度の場所で保管する。

- ⑤保管中のサーベイメータの電圧チェックを時々行い、電池が消耗しているときは、新しい電池と交換する。消耗した電池を交換しないで長期間放置した場合、電解液の漏出により電池ホルダー端子の腐食、その他の故障の原因となることがある。

4)電池交換の手順

- ①FUNCTION切り換えスイッチが [OFF] の位置にあることを確認する。
- ②サーベイメータ底部の蓋を外す。
- ③電池ホルダーの電池を全て交換する。
(ホルダーに示してある極性に合わせて電池を装填する。)
- ④電池ホルダーの蓋をする。
- ⑤FUNCTION切り換えスイッチを [OFF] から [BATT.] の位置にして、電池の電圧をチェックする。メータの指針が右半分の緑の位置にくることを確認する。



写真 I .1.4 電池の交換

GMサーベイメータTGS-146の取扱方法

GMサーベイメータ（日立アロカメディカル製TGS-146型）の外観および各部の名前を写真 I .2.1に示す。



写真 I .2.1 GMサーベイメータ（日立アロカメディカル製TGS-146型）

(1)各部の名称と働き

①GMプローブ

GM計数管が収納されており β (γ) 線を検出する。

②リセットスイッチ

メータを初期状態にリセットする（指針がゼロに戻る）。

③レンジ表示用LED

現在設定されている測定レンジを示す。

④TIME CONST.（時定数）スイッチ

メータの時定数を3秒、10秒、30秒のいずれかに切り換える（メータ指示値の読み取りには時定数の2～3倍の時間が必要である）。

⑤FUNCTIONスイッチ

測定状態でFUNCTION状態（項目の選択）への切り換え、解除を行う。

⑥指示計（メータ）

計数率を示すメータで、下側の目盛りでは0～100の単位で計数率 [min^{-1}] が示され、上側の目盛りでは0～300単位で計数率 [min^{-1}] が示されている。⑧、⑨で選択した最大スケールに対応している。

高電圧不具合のため、専門家による調整が必要である。

2)身体表面汚染の測定法

①GMプローブをラップフィルムか薄手のビニール袋等で包む。

(スピーカーのスイッチはOFFの状態を使用する。)

バックグラウンド計数率を測定する。このときの時定数として10秒を選択する。

②GMプローブの窓面を身体表面より約1cm離し、身体表面の各測定部位内をゆっくりとした速さ(3~6cm/s)で移動させて、計数率が最大となる場所を探す。最大値が得られた場合、その場所にGMプローブを約30秒保持してから計数値を読み取る。

③メータの指針が振り切れたり小さすぎないように、▲▼スイッチにより適当なレンジを選択する(レンジを切り換えたときは、指針の振れが落ち着くまで若干の時間を要する。)

④計数率が低くて指針がふらつく場合は、時定数を10秒または30秒に設定し指針の振れ幅の中央値を読み取る。

⑤指示値の読み方は、レンジスイッチがどの値に設定されているかによって変わるので、必ず確認する。

⑥測定が終了した後は、電源スイッチを押し電源を切る。

3)注意事項

①GMプローブは破損しやすいため、特に注意して取り扱い、衝撃等は加えないようにする。

②ケーブルには断線の原因となるような力を加えないようにする。

③使用していないときは電源スイッチを押し電源を切る。

④サーベイメータは常温、低湿度の場所で保管する。

⑤保管中のサーベイメータの電圧チェックを時々行い、電池が消耗しているときは、新しい電池と交換する。消耗した電池を交換しないで長期間放置した場合、電解液の漏出により電池ホルダー端子の腐食、その他の故障の原因となることがある。

4)電池交換の手順

①電源が切れていることを確認する。

②サーベイメータ底部の蓋を外す。

③電池ホルダーの電池を全て交換する。

(ホルダーに示してある極性に合わせて電池を装填する。)

- ④電池ホルダーの蓋をする。
- ⑤電源スイッチを押し、起動時の電池残量をチェックする。新しい電池に交換した場合は、B A T T. = ■■■■と表示される。



写真 I .2.2 電池の交換

NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータ(TCS-161)の取扱方法

NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータ（日立アロカメディカル製TCS-161型）の外観および各部の名前を写真Ⅱ.1.1に示す。



写真Ⅱ.1.1 NaI(Tl)シンチレーション式サーベイメータ
(日立アロカメディカル製TCS-161型)

(1)各部の名称と働き

①シンチレーションプローブ

NaI(Tl)シンチレーション検出器が保護ケースに収められている。

②RANGEスイッチ

線量率の測定範囲を設定するスイッチ。設定した値がメータの最大値になる。

③FUNCTIONスイッチ

[OFF] → [BATT.] → [HV] → [USE] → ] の5段階切換えになっている。

OFF : 電源が供給されていない状態。

BATT. : 電池の電圧チェックを行う。指針がメータの「緑帯」の左側を指示した場合は電池を交換する。

HV : 高電圧をチェックする。正常の場合、メータの指針がHVと書かれた赤帯（レッドベルト）内を指示する。

USE : 測定状態になり線量率を指示する。

 : スピーカー。計数のモニタ音が聞こえる。

④指示計（メータ）

線量率、電池電圧、検出器印加電圧のチェック。液晶パネルは、デジタルで線量率が表示される。

⑤TIME CONST.スイッチ

時定数を設定するスイッチ。

⑥メモリースイッチ

スイッチを押すとデータレコーダにデータが自動転送される。

⑦REC.

アナログ記録計を接続するコネクタ。+10mV/フルスケールの記録計を接続することが可能である。

⑧DATA OUT

データレコーダに接続する端子、メモリースイッチで押したときに出力される。

⑨ACアダプタ接続端子

ACアダプタを使用するとき、この端子に接続する。

(2)操作方法

NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータで、空間の γ 線による線量率を測定するときの使用方法について述べる。

1)電源チェック

①FUNCTIONスイッチを [OFF] から [BATT.] の位置にして、電池の電圧をチェックする。メータの指針が右半分の緑帯（グリーンベルト）の位置にくることを確認する。メータの指針が緑帯まで達しないときには電池を交換する。

②FUNCTIONスイッチを [HV] の位置にして、高電圧をチェックする。メータの指針がHVと書かれた赤帯（レッドベルト）まで達しないときには、専門家による調整が必要である。

2)線量率の測定法

①RANGEスイッチを最大値から順に切換え、メータの指示値が読み取りやすい値のところに設定する。

②バックグラウンド値を測定する。通常、 $\sim 0.1 \mu \text{Sv/h}$ 程度を示す。

③測定場所では、地上約1mの高さで測定する。

④TIME CONST.スイッチの設定値は、計数率が小さい場合には10秒または30秒に設

定すれば、指針の振れが少なくなって読み取りが容易になるので、状況に応じて切替えて使う。ただし、いずれの場合も設定値の3倍の時間が経過してから平均的な値を読み取る。

- ⑤指示値の読み方は、RANGEスイッチがどの値に設定されているかによって変わる。フルスケールの値に注意して数値を読み取る。
- ⑥測定が終了したらFUNCTIONスイッチを [OFF] にする。

(3)使用上の注意

- ①使用前に必ず動作が正常かどうか確認する。
- ②精密機器なので丁寧に取り扱い、ショックを与えないようにする。
- ③必要に応じて、サーベイメータをポリエチレンシートで覆い、濡れたり汚染したりしないようにする。

(4)点検・保守

- ①湿気の少ない場所に保管する。
- ②長時間使用しない場合は、電池を取り出してサーベイメータと一緒に保管する。少なくとも1カ月に1回は電池をチェックして常にサーベイメータが正常に動作することを確認しておく。故障原因としては電池の腐食による接点不良や液漏れによる回路破損が最も多い。
- ③所期の性能を維持するため、1回／年を目安に点検校正を行うことが望ましい。

NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータ(TCS-171)の取扱方法

NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータ（日立アロカメディカル製TCS-171型）の外観および各部の名前を写真Ⅱ.2.2に示す。



写真Ⅱ.2.2 NaI(Tl)シンチレーション式サーベイメータ
(日立アロカメディカル製TCS-171型)

(1)各部の名称と働き

①電源スイッチ

Power ON/OFFスイッチ

②FUNCTIONスイッチ

測定状態でFUNCTION状態（項目の選択）への切り換え、解除を行う。

③モニタ音スイッチ

モニタ音のON/OFFを行う。

④TIME CONST. (時定数) スイッチ

時定数を設定するスイッチである。

⑤MEMORYスイッチ

測定状態で、測定値をメモリーする。FUNCTION状態では、選択項目の決定を行う。

⑥単位切り換えスイッチ

測定器の単位を、Sv/hとGy/hに切替える。

⑦項目設定（▲、▼）スイッチ

FUNCTION状態で、時刻、ブザー音量等の項目の設定を行う。

⑧指示計（メータ）

上部のLEDにレンジと単位が、液晶表示器にはFUNCTIONで選択した項目が表示される。

⑨PROBE接続コネクタ

シンチレーションプローブを接続する。押して右回しで固定される。

⑩REC.（レコーダー出力）

記録計を使用するときの接続端子である。

⑪DC IN（ACアダプタ入力）

ACアダプタ入力を使用するとき、接続する端子である。

⑫シンチレーションプローブ

NaI(Tl)シンチレーション検出器が保護ケースに収められている。

(2)操作方法

NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータで、空間の γ 線による線量率を測定するときの使用方法について述べる。

1)電源チェック

①電源スイッチを押すと自動的に測定状態になり、時定数と計数率が $\mu\text{ Sv/h}$ で表示される。 $\mu\text{ Gy/h}$ を計測するときは、単位切換えスイッチを押して切換える。

②放射線の計測数を“音”で確認したいときは、モニタ音スイッチを押す。

2)線量率の測定

①▲、▼スイッチで $[0.3(\mu\text{ Sv/h})]$ レンジ、TIME CONST.スイッチで時定数を $[30(\text{sec.})]$ に設定し、バックグラウンド値を測定する。通常、 $\sim 0.1\mu\text{ Sv/h}$ 程度の値を指示する。

②▲スイッチで測定計数レンジを最大 $[30(\mu\text{ Sv/h})]$ に設定する。

③測定場所では、原則として地上約1mの高さで測定する。

④▲、▼スイッチで測定計数レンジを切換え、メータの指示値が読取りやすいところ（目盛の中央付近）に設定する。

⑤時定数の設定はTIME CONST.スイッチにより行い、計数率が小さい場合には10秒または30秒に設定すると、指針の振れが少なくなって読取りが容易になるので、状

況に応じて切換えて使用する。ただし、いずれの場合も時定数の設定値の約3倍の時間が経過してから平均的な値（指針の振れ幅の中央値）を読取る。

⑥測定値は、レンジが [0.3]、[3] および [30] のときは上の目盛りで読み、レンジが [0.3] のときは読取り値を1/10に、レンジが [3] のときは読取り値のまま、レンジが [30] のときは読取り値を10倍にする。また、レンジが [1] および [10] のときは下の目盛りで読み、レンジが [1] のときは読取り値を1/10に、レンジが [10] のときは読取り値のままとする。

⑦測定が終了したら電源スイッチを押し、電源を切る。

(3)使用上の注意

- ①使用前に必ず動作が正常かどうか確認する。
- ②精密機器なので丁寧に扱い、ショックを与えないようにする。
- ③雨天時や汚染レベルの高い区域で測定するときは、サーベイメータをポリエチレンシートで被い、濡れたり汚染したりしないようにする。

(4)点検・保守

- ①湿気の少ない場所に保管する。
- ②長時間使用しない場合は、電池を取り出してサーベイメータと一緒に保管する。少なくとも、1ヵ月に1回は電池をチェックして、常にサーベイメータが正常に動作することを確認しておく。故障原因としては電池の腐食による接点不良や液漏れによる回路破損が最も多い。
- ③ACアダプタでの長時間の連続使用を避ける。
- ④所期の性能を維持するため、1回／年を目安に点検校正を行うことが望ましい。

アラーム付個人線量計ADM-112の取り扱い方法

アラーム付個人線量計（日立アロカメディカル製ADM-112型）の外観および各部の名前を写真Ⅲ.1.1に示す。



写真Ⅲ.1.1 アラーム付個人線量計（日立アロカメディカル製ADM-112型）

- ①電源スイッチを長押し（3秒）し、電源を入れる。
- ②液晶表示テストが行われた後、アラーム設定レベルを表示するとともに、1.5秒間ブザーが鳴り、アラームランプが点滅し、本体全体が振動する。
- ③その後、測定が開始される。なお、それまでの線量値が蓄積されている場合は、積算線量を表示する。積算線量をリセットするときには、いったん電源を切り、再度電源スイッチを10秒間以上押し続けて電源を入れる。

④装着方法

- ・測定部を必ず体の外側に向ける（液晶表示部を体側に向ける）。
- ・原則として、男性は胸部、女性は腹部に装着する。
- ・使用中に紛失しないよう、付属の紐で首からぶら下げる。
- ・実習の「最初」と「最後」には数値を必ず確認する。



- ⑤万が一、積算線量がアラーム設定値を超えると、表示が点滅するとともに、ブザーが鳴りアラームランプが点滅し、本体全体が振動して警報する。
- ⑥電源を切るときには、電源スイッチを長押し（3秒）する。

注意

- ・強い電波を受けると誤計数することがありますので、携帯電話、PHS、高出カトランシーバーなどの近くで使用しないようにして下さい。

アラーム値の設定方法

- ①アラーム値設定モード (**ALARM**) ボタンを押したまま、アラーム値セット (**SET**) ボタンを1回押した (押し続けず) 後、**ALARM** ボタンを離す。このとき、ブザーが鳴り、表示部右上の▶が点灯し、現在のアラーム設定値が表示される。この状態がアラーム設定モードとなる。
- ②**SET** ボタンを1回押すごとに、アラーム値は下記に示す18通りに変化する。

0.100	1.000
0.200	2.000
0.300	3.000
0.400	4.000
0.500	5.000
0.600	6.000
0.700	7.000
0.800	8.000
0.900	9.000

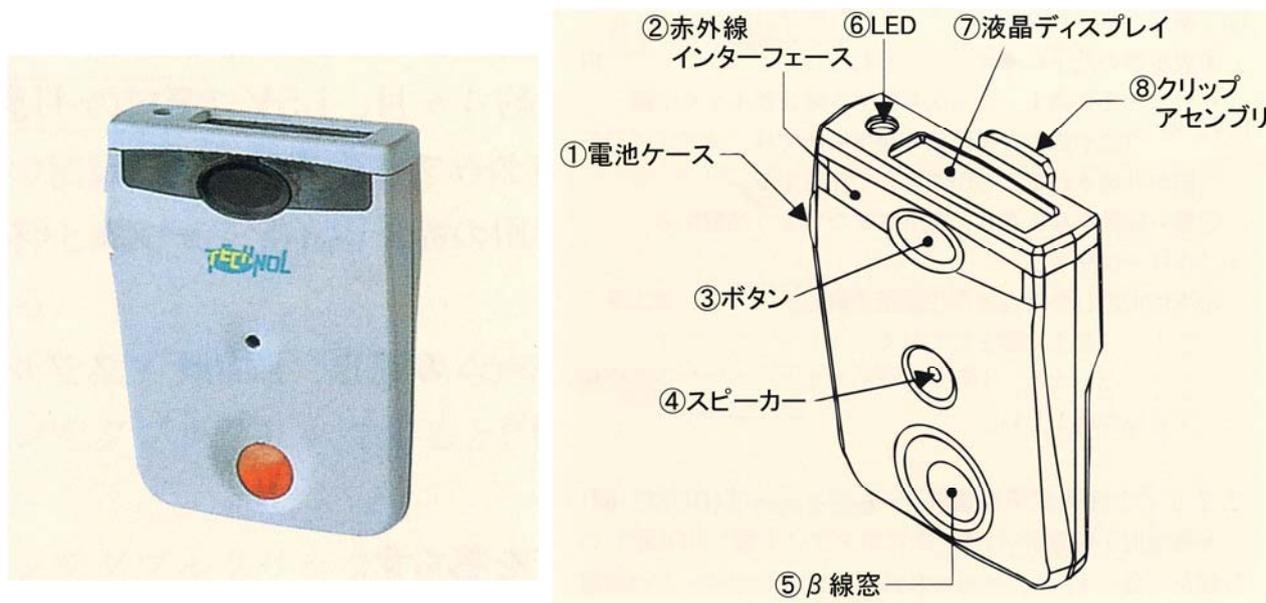
- ③アラーム値設定後、測定表示に戻る場合は、再度**ALARM** ボタンを押したまま、**SET** ボタンを1回押した後 (押し続けず)、**ALARM** ボタンを離す。この時、ブザーが鳴り、表示部の▶が右下に移動し点灯する。これで測定表示モードに戻る。

注意：

- ・それぞれのモード設定中 (ブザーが鳴るまで) は、電源を切らないで下さい。
- ・アラーム値セット (**SET**) ボタンは、誤操作防止のため、指先では操作ができません。先のとがったもので操作して下さい。なお、シャープペンシルのような先の折れる可能性のあるものは故障の原因となるため、使わないで下さい。

多機能電子線量計(DOSE³[ドーズキューブ])の取り扱い方法

多機能電子線量計 DOSE³ [ドーズキューブ] (千代田テクノル製) の外観および各部の名前を写真Ⅲ.2.1に示す。



写真Ⅲ.2.1多機能電子線量計 DOSE³ [ドーズキューブ] (千代田テクノル製)

DOSE³ (株千代田テクノル製) は、様々な機能を持っていますが、緊急被ばく医療で主に必要となる積算線量とアラーム設定について説明します。

(1)各部のはたらき

①電池ケース

単三塩化チオニルリチウム電池 (3.6V) または、単三アルカリ電池 (1.5V) を使用。

※塩化チオニルリチウム電池 (3.6V) では、約4ヶ月、アルカリ電池 (1.5V) では、約1か月動作。

②赤外線インターフェース

データ通信用の赤外線インターフェース。

③ボタン

操作、アラームの停止、液晶ディスプレイ表示項目の選択を行うボタン。

④スピーカー

アラーム音を鳴らす。

⑤β線窓

β線用の検出窓。

※β線検出用のフィルターは薄い金属でできているので取扱いに注意すること。

⑥LED

アラームを光で知らせる。

⑦液晶ディスプレイ

ボタンで選択した項目を表示する。

⑧クリップアセンブリ

衣服に装着したり、ストラップを取り付ける。

(2)測定方法

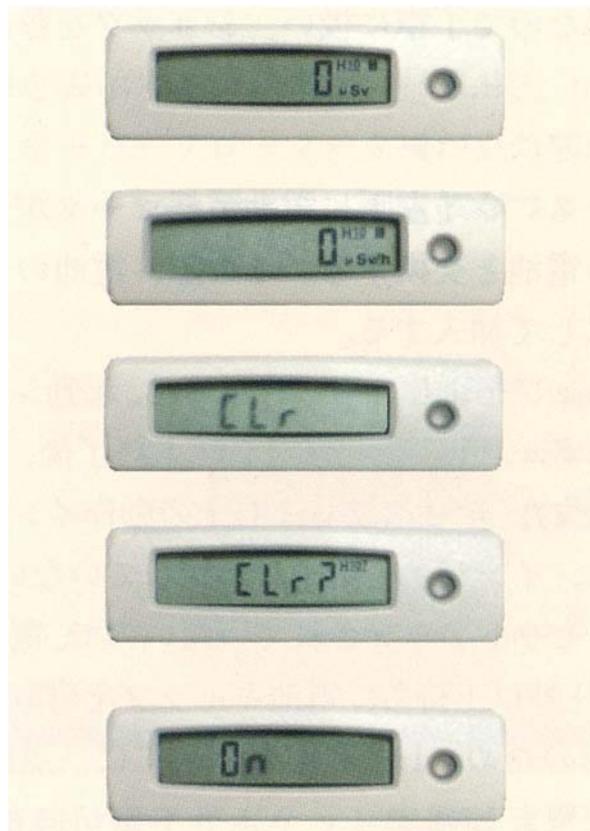
(2)-1 電源の入れ方

①電池をセットすると液晶ディスプレイに「OFF」が表示され、電源が入る（「OFF」モード）。

（「OFF」以外の記号が表示される場合は10秒後に「0 μSv 」が表示され、測定状態に入る。）

※「OFF」モードは節電モードであり、電池を抜かない限り電源断とはならない。

②「OFF」モードより測定モードへの切替
液晶ディスプレイの「OFF」表示が変わる（「OFF」表示が消えて表示が変わる）までボタンを長押しする（表示が変わった時点で指を離す）。10秒後に「0 μSv 」が表示され、測定状態に入る。



(2)-2 リセットの方法

①液晶ディスプレイに「CLr」が表示されるまでボタンを長押しする（「CLr」が表示されたらボタンを離す）。

②ボタンを短く押すと「CLr？」と表示される。

③ボタンを短く2度押す（ダブルクリック）と「CLr？」が点滅を始める。

④再度、ボタンを短く2度押す（ダブルクリック）と「CLr？」が消えて、表示が「0000」に変わり、続いて「0 μSv 」が表示され、測定が開始される。

(2)-3 リセットの方法

- ①液晶ディスプレイに「On」が表示されるまでボタンを長押しする（「On」が表示されたらボタンを離す）。
- ②「On」の表示が出ている間に、ボタンを短く2度押す（ダブルクリック）と「OFF」表示の点滅になる。
- ③再度、ボタンを短く2度押す（ダブルクリック）と「OFF」の固定画面となり、「OFF」モードとなる。

※「OFF」モードは節電モードであり、電池を抜かない限り電源断とはならない。
なお、「OFF」モードでは、放射線の測定は行われないことに注意すること。

(2)-4 積算線量⇔線量率の測定

- ①積算線量の表示から線量率を測定する場合には、ボタンを短く1度押す。このとき表示は、「0 $\frac{H^{10}}{\mu Sv}$ 」から「0 $\frac{H^{10}}{\mu Sv/h}$ 」へ変化する。
- ②線量率の測定から積算線量を表示するには、ボタンを短く4度押す。このとき表示は、「0 $\frac{H^{10}}{\mu Sv/h}$ 」から「0 $\frac{H^{10}}{\mu Sv}$ 」へ変化する。

(2)-5 アラームの設定

- ①アラーム値を確認するには、液晶ディスプレイに「dAL」が表示されるまでボタンを長押しする（「dAL」が表示されたらボタンを離す）。
- ②ボタンを短く押すと現在のセット値が表示される。
- ③次にボタンを短く2度押す（ダブルクリック）と「10」と表示され数字が点滅する。
ボタンを短く押すごとに、アラームのセット値が増加する。必要な値が表示されたら、短く2度押し（ダブルクリック）し、セット値を決定する。
- ④セット値の変更モードに入ってから変更を中止したい場合は、「ESC」が表示されるまでボタンを短押しを繰り返す。「ESC」が表示されたら、短く2度押し（ダブルクリック）し、変更モードから抜ける。このとき、セット値は変更されない。

本体でセットできるアラーム値：

10 μSv 、50 μSv 、100 μSv 、500 μSv 、1mSv、5 mSv、10 mSv、50 mSv、100 mSv、500 mSv、1.0Sv

(3)使用上の注意

- ①液晶画面は右側にLED窓がくる様にして表示を読む必要がある。
- ②液晶画面に「On」が表示されても、そのままにしておくと10秒後に自動的に測定モードに切替る。
- ③画面を見逃してしまった場合には、ボタンを押し続け、再度必要な画面を表示させる。
- ④β線窓を外側（クリップアセンブリを体面側）に向けて、男性は胸部、女性は腹部に装着する。
- ⑤作業終了時に、必ず必要な指示値を読み取ってから指定された場所に保管する。
「OFF」モードまたは、電池を抜き取る。
- ⑥精密機械なので丁寧に扱い、ショックを与えないようにする。
※塩化チオニルリチウム電池は、落下や衝撃を与えると内部の塩化チオニルが漏れて塩化水素や亜硫酸ガスが発生するので取り扱いには注意を要する。

(4)点検・保守

- ①液晶ディスプレイ左下に電池消耗マークが点灯したときは、新しい電池と交換する。
電池キャップを正しく取り付けると、起動シーケンスが自動的にスタートし、自己診断テスト終了後、積算線量を表示する。その際、ディスプレイ右上の動作インジケータが点滅する。もし、インジケータが点滅していないときには、電池が正しくセットアップされていないので、電池キャップをはずして再度取り付ける（再取り付けの際には、10秒以上待つこと）。
- ②性能確認のため、1回／年をめやすに点検校正を実施するのが望ましい。

参考：液晶ディスプレイ上の画面選択

表示内容		0	1	2	3	4	5
ボタン操作：長押し→次の画面の表示またはアラームの消音	0 無表示	ボタン操作：短く押す					
	1 H10線量	HP10	H10線量*	H10線量率*	ユーザID 数字上4桁	ユーザID 数字中4桁	ユーザID 数字下4桁
	2 H07線量	HP07	H07線量*	H07線量率*			
	3 トータル線量	tot	トータル H10*	トータル H07*			
	4 カウント ダウンタイマ	SECS	カウント ダウンタイマ*	タイマ リセット			
	5 パワーセービング	On OFF					
	6 ピーク線量率	rhi	H10ピーク 線量率*	H07 ピーク線量率*			
	7 テスト	tEst					
	8 線量リセット	CLr	H10、H07 線量クリア				
	9 線量アラーム	dAL	1st : H10 線量アラーム セット値	2nd : H10 線量アラーム セット値	H10 線量アラーム セット値		
	10 線量率 アラームON	r on	1st : H10 線量率 アラームON セット値	2nd : H10 線量率 アラームON セット値	H10 線量率 アラームON セット値		
	11 線量率 アラームOFF	roFF	1st : H10 線量率 アラームOFF セット値	2nd : H10 線量率 アラームOFF セット値	H10 線量率 アラームOFF セット値		
	12 音響設定	bEEP	ボタン操作音 ON/OFF	チャープ 線量設定			

* ロック可能な画面